

額田王の一一三番歌題詞「蘿生松柯」再考

——万葉集中の「蘿生」は「こけむす」と訓んでよいか——

月 野 文 子

一、はじめに

『万葉集』巻二の相聞部に「藤原宮御宇天皇代（持統朝）の歌として収載される弓削皇子と額田王の贈答歌（一一一番歌・一二二番歌）があり、その後「從吉野折取蘿生松柯遣時、額田王奉入歌一首」の題詞を持つ額田王の歌（一一三番歌）が置かれている。かつて筆者は、この三首を同一機会に詠まれたものと考えた場合の（注1）一一三番歌の位置づけを、その題詞から考察したことがある。その際に、従来はコケの意に解釈されてきた「蘿」を、中国古典文学の用例から松に絡まる蔓性植物と結論づけたのである。（注2）さらに、吉野から遣された松柯は樂府詩「華山畿二十五首中の「松上蘿」を下敷きにした謎かけであることも指摘した。

『万葉集』中に「蘿」字の用例は十二箇所あるが、その中で最初に出てくるのが当該題詞の「蘿生松柯」である。古くは問題にはされなかったのであるが、江戸期の注釈書がこれを「こけ」と解したのに引きずられ、集中の他の「蘿生」を「こけむす」と訓むようになった蓋然性が高いように思われる。一一三番歌題詞の「蘿」がコケではな

く、蔓性植物を指すのであれば、他の用例の解釈も再検討する必要がある。前稿では、この点と『和名抄』および本草学の書物の確認が十分ではなかったもので、本稿では、これを補うかたちで再考し、一一三番歌の題詞のみならず、『万葉集』における「蘿生」表記の訓みを検討する。そのため、前稿と内容の重複する部分があることを予め断っておく。まず、当該歌三首をあげる。

吉野宮に幸せる時に、弓削皇子、額田王に贈り与ふる歌一首

A 古に恋ふる鳥かもゆづるはの御井の上より鳴き渡り行く(巻二・一一一)

額田王の和へ奉る歌一首 倭の京より進入る

B 古に恋ふらむ鳥はほととぎすけだしや鳴きし吾が思へること(巻二・一一二)

吉野より蘿の生じたる松柯を折り取りて遣しし時、額田王奉り入る歌一首

C み吉野の玉松が枝は愛^はしきかも君がみ言を持ちて通はく(巻二・一一三)

筆者の考える額田王のC歌の位置づけと「蘿」が蔓性植物であることを確認するにあたって、まず、A歌とB歌が詠まれた状況についても簡単に触れておこう。題詞によれば、吉野行幸に供奉した弓削皇子が倭の京(明日香宮)に残っていた額田王に歌を贈り、額田王がそれに和した歌を吉野へ戻る使者に託したのである。C歌は、その後更に弓削皇子が額田王のところへ「蘿生の松柯」(柯は枝)を届けさせ、額田王が歌で応えたものとされている。

諸注釈は、前に置かれたAの弓削皇子の贈歌が行幸先の吉野で詠まれており、額田王C歌の題詞にもまた、「吉野より遣わされた松」とあることから、その行為は弓削皇子によるものという解釈で落ち着いているが、C歌に対する考察はA・Bに比べて手薄であり、また、題詩と歌との関係について詳しく検討したものはほとんどないと言つてよいだろう。

二、『和名抄』における「蘿」「松蘿」

江戸期の注釈が額田王の一一三番歌の題詞の「蘿」を「こけ」と訓むようになったのは、準拠すべき書物として度々刊行された『和名抄』^(注3)の記述によるところが大きいものと思われる。『和名抄』は「蘿」を苔類に分類しており、『唐韻』『日本紀私記』二つの書物を引用して次のように記している。

蘿 唐韻云蘿魯何反日本紀私記云蘿比加介女蘿也

『唐韻』からの引用は「蘿魯何反女蘿也」である。『唐韻』は韻書であるから「蘿」字の発音を反切で示し、簡単な意味を付すだけである。『和名抄』はこれに挿入するかたちで、「日本紀私記云蘿比加介」と説明する。但し、『日本紀私記』の表記は「比舸礙」である。これは神代紀において、天鈿女命が手に茅纏の稍を持ち天石窟戸の前に立つて、天照大神を呼び出す為のわざをぎをする際の解説箇所である。該当箇所の『日本書紀』『古語拾遺』『古事記』を確認してみると、それぞれ、

(紀) 以天香山之真坂樹為蔓、以蘿 此云比舸礙 為手纏 手纏、此云多須枳

(古) 以真薜葛為蔓、以蘿葛為手纏 蘿葛者比可気

(記) 手次繫天香之山天之日影而、為幔天之真折而

となっている。『和名抄』は、『日本紀私記』に「蘿比舸礙」とあるのを参照したうえで仮名を簡単なものに改めたことになる。なお、『古語拾遺』においては当該箇所は「蘿葛を以つて手纏と為す」で、「蘿」ではなく「蘿葛」としている点は注意しておきたい。「纏」は紐、綱の意である。また、『古事記』においては「日影」と記されている。岩屋戸神話に関わる「蘿」は、手纏・手次(擗)とするのであるから、蔓性の植物でなければならず、今日我々がイメージするような苔類ではあり得ない。『古語拾遺』の「蘿葛」の表記が「蘿」のイメージを正確に伝えているといえよう。

なお、『和名抄』が引用した『唐韻』そのものは現存しないが、『唐韻』が基礎とした『切韻』、また『唐韻』を修訂増補した『広韻』は現存する。『切韻』については、系統の異なるものも含めて五つの伝本を確認することができたが、これらは全て「蘿」字の意味を「蘿葛」の熟語に置き換えて説明している。また、『広韻』では『唐韻』と同じく「蘿」を「女蘿」と説明する。^(注5) これまでにあげた文献の「蘿」は、みな蔓性植物を指しているのである。ところが、二十卷本『和名抄』は「蘿」の次に「松蘿」を立項しており、そこでは

松蘿 辨要決云松蘿一名女蘿 和名萬豆乃古介一云佐流乎加世

とするのである。つまり、同書は隣接する二つの項目で、一方では〈蘿Ⅱ女蘿〉とし、一方では〈松蘿Ⅱ女蘿〉としておきながら、蘿の和名は「比加介」とし、松蘿の和名は「萬豆乃古介」「佐流乎加世」と説明しているのである。また、十卷本『和名抄』では、二十卷本が二つの項目に分ける「蘿」と「松蘿」が一つに纏められている。

蘿 唐韻云蘿 盧多反日本紀私記云蘿比加介 女蘿也雜要決云松蘿一名女蘿 万豆乃古介一云佐流乎加世

しかし、「比加介」と「佐流乎加世」は形状が異なるので、何故そのような説明になるのか不可解である。「一云」は異伝であって、別名ではないということであろうか。『和名抄』に先立つ『本草和名』^(注6)に松蘿の記載はあるが、

松蘿一名女蘿一名葛蘿一名唐蘿一名玉女一名鳶蘿一名蔓蘿一名蔓女蘿一名菟絲和名末都乃古介

とあって、女蘿以下八つの別名を挙げてはいるが、和名は「末都乃古介」とするのみで、さるをかせに関する記述はない。また、このマツノコケが海松の如く〈松に似た形状のコケ〉なのか、〈松に生じるコケ〉なのか不明である。すると、『和名抄』の「一云佐流乎加世」の部分が後世の書き入れであった疑いも生じる。なお、二十卷本『和名抄』のなかには、寛文七年村上版のように、「蘿」とし、「松蘿」^(マツノコケ)には、左右にマツノコケサルヲカセの振り仮名をつけているものもある。江戸期の本草学の書物の多くが「松蘿」^(サルヲカセ)の項目を設け、そこにサルヲカセの読み仮名を

付していることも関係があるのだろう。

二十巻本『和名抄』が項目を別に立てる以上、どこかで「蘿」と「松蘿」とは別の物だという認識が生じたはずである。ただし、「蘿」はヒカゲカズラで、「松蘿」だけがサルヲガセをさすのだとしても、C歌題詞の問題は解決しない。山地に自生するヒカゲカズラは地上を這って延びるが樹木に這い上がることはない。また、サルヲガセは亜高山帯の樹木に付着する植物(付着)であり、吉野離宮周辺には生育はしないはずだからである。

神話に見える蘿「比加介」(日影Ⅱひかげかづら)は、山地に自生する葛性の多年生常緑草本で松や杉に似た針状の葉をもち、茎は地上を這って延び分枝する。いわゆる苔類とは様相を異にする。常緑で刈り取ってもしばらくはその緑を保つことから、長く延びた紐状の茎は神事の際、冠を止める笄の左右に懸けて「かざし」とした。「かざら」とも「蘿(かげ)」ともよぶ。もともと「蘿」が蔓状の植物を広く指す漢字であったため、我が国では地上を這って蔓状に延びる比加介にも「蘿」があてられたものと思われる。『日本書紀』や『古語拾遺』の用例があり、漢文学の蘿が蔓性の植物をさす以上、やはり、万葉中の「蘿生」の表記を一概に「こけむす」意に解釈してしまうことはできないだろう。『芸文類聚』を見てみると、草部上に項目として立てられているのは「蘿」ではなく〈女蘿〉である。また、配列を確認してみると、「女蘿」は蔓性の寄生植物であるところの「菟絲(注)」の次に配置されている。草部下におかれる「苔」とはかなり隔たったところにある。むろん、「苔」の項目は水草や水辺の植物と並ぶ。

一方、二十巻本『和名抄』では、巻二十の後半から水辺の植物である萍、蒲、菰、菖蒲、藺などが並び、それに続くのが苔類の項目で苔、屋遊、石衣、垣衣、蘿、松蘿が並ぶ。苔は「陸詞切韻云苔和名古介水衣」また、石衣は「石衣和名知比佐木古介」とあるが、『爾雅』では「澗石衣」とし、『爾雅註疏紀聞(注)」はこれを本草の記述から「カハモツク、カハアヲノリ」とする。石衣は水中の石につく苔や藻のことである。垣衣は『和名抄』に「一名青苔衣一名屋遊：和名之乃布久佐一名古介」とある。ここに「蘿」と「松蘿」が続き、後ろに蓮類が置かれる。「蓮類」という分類語があるものの、そこに置かれるのは、芙蓉、藕、菔、密、茄など爾雅がハスの各部の名称を連ねているのをそのまま引用しているにすぎない。ハスは水中で生育する植物であるから、水中の藻をいう苔や石衣の後に続いてもお

かしくはないのに、何故か間に「蘿」と「松蘿」が入っている。しかも、蓮類に続くのが葛類なのである。本来は葛類に置かれるべき「蘿」と「松蘿」が何等かの事情で水辺の植物の中に紛れ込んだと考えるとわかりやすい。

ともかく、『和名抄』において「蘿」と「松蘿」が苔類の部に置かれたことが、後の時代の万葉の訓みにも影響を及ぼしたことになるのだろう。もう一つ、「蘿」の解釈が紛れやすい事情があった。後に述べる詩経の「頰弁」の毛伝に「女蘿兔絲松蘿也」（女蘿は兔絲、松の蘿なり）とあることである。『爾雅』では「唐蒙女蘿、女蘿兔絲」（唐蒙は女蘿、女蘿は兔絲）とするが、「松蘿」の語は見えない。女蘿（蔓状植物をいうもつとも一般的な呼称）の形状を別の植物で説明すればよいと考えたのである。松蘿が松に絡んだ蘿と理解されていたことの証ともいえる。ところが、「松の蘿」を「松蘿」という植物名とする誤解が生じて混乱したのである。『爾雅』に「松蘿」の語がない以上、『爾雅註疏紀聞』にも「松蘿」の独立した項目はない。しかし、『爾雅註疏紀聞』は、「唐蒙女蘿、女蘿兔絲」のついでに、本草学の立場から松蘿の説明を追加しているのである。ここでは女蘿についての誤解が更に進んでいる。

唐蒙ニ女蘿モ皆松蘿ノコト也……女蘿は松のサガリコケトモ云、深山松樹ノ枝ニカヽリテアリ形状太キ糸ノ如ク白色ニシテアヲミアリ……日光ノモノハ五七尺ニモ至ル

また、同書は蒙王母を「松蘿也」としていて、この松蘿にサルヲガセの読み仮名をつけている。完全に混同しているようである。サルヲガセが亜高山帯の植物であるため、実態を把握していなかったとみられる。

さて、『和名抄』の記述によれば、蘿＝女蘿＝松蘿となる。これだけでは蘿が〈古介〉である蓋然性はない。『大漢和辞典』で「松蘿」を引くと「地衣の一。さるをがせ、さがりごけ。……また、松樹に絡まるかづらをいふ。女蘿」とある。つまり、サルヲガセという理解だけでなく、「蘿」が松の木に絡んで一緒になっているものを「松蘿」という解釈もしているのである。ここに多くの用例を載せてはいるのだが、それらは女蘿と兔絲を併せて述べた文献であり、「松蘿」なる植物があるとは認識されていないようなのである。ここにサルヲガセと限定できるような用例は見出せない。中国古典文学の用例からすれば、「松に絡まるかづら」と捉えることが普通であり、とくに遊仙詩や山

水詩では「蘿」はつたかずらの類を表す語として、蘿蔓、蘿葛、藤蘿、薜蘿など平仄も勘案されて熟語となり、隠者の棲家や深山を表現する際には欠くことのできない景物となつてゐる。漢詩文の用例を見れば、C歌題詞にみえる「蘿」を、「蔓」性植物の意味に解釈する方が違和感がないのである。

三、額田王の一二三番歌の題詞の解釈

すでに前稿で述べたが、A Bのやりとりは謎かけとその解答であつたと考えられる。その後には置かれたCも含めた三首を一連の作と見做すのであれば、当然、C歌題詞にみえる〈吉野から遣わされた「蘿生松柯」〉も謎かけで、C歌がその答えであると見るべきであろう。この松の枝に現存しない歌が結びつけられていたのではなく、蘿生松柯そのものがメッセージ（謎かけ）であつたと考えたい。

従来説では、A B歌が天武天皇の時代を懐かしむ、いわば〈懐旧〉を詠むものと解釈するために、C歌およびその題詞もA B同様に、〈懐旧〉を嘆ずることの延長にあるものとして扱われることになる。つまり、題詞の「吉野からもたらされた蘿生松柯」も〈懐旧〉の延長と認識されることになる。したがって、そこに「いにしへ（歳月を経たこと）」の象徴性を読み取ろうとして、「こけむす」と解釈した。「蘿」という漢字は本来、蔓性植物を意味するものである。それにも拘わらず、歳月の経過を読み取るのに都合のよいコケ類へ傾いてしまったのである。これには「蘿」の解釈に対する混乱が古くからあつたことが関係しているだろう。

たとえば、契沖の『代匠記』^(在10)は『和名抄』を引用して、

和名云、辨要決云松蘿一名女蘿和名萬豆乃古介一云佐流乎加世

とし、『古今六帖』と『元輔集』から〈松の苔〉を詠んだ歌を例にあげている。また、賀茂真淵の『万葉考』には、

下に子松之末爾蘿生^{コハス}まで、卷十四梓桴之末爾薛生^{コハス}までにてふも同じくて、深き山の古木に生る日影の事也、和名抄に蘿日本紀私記云蘿比加介女蘿也和名萬豆乃古介一云佐流乎加世と云り。

とある。「蘿」を深山の古木に生える「日影」のこととし、その一方で、「蘿生」にコケムスと読み仮名を付している。山地に生える日影と、深山に生えるサルヲガセと混同している。蘿と松蘿を一つの項目とする十卷本『和名抄』を引用しているようだが、「雜要決云松蘿一名女蘿」の部分を脱している。橘千蔭の『万葉集略解』は「山の古木に生る日蔭の事也、和名抄蘿日本紀私記云蘿比加介女蘿也、和名萬豆乃古介一云佐流乎加世」と、ほぼ『万葉考』を引き写している。ヒカゲとサルヲガセを同一視するのは、それ以前に刊行された貝原益軒の『大和本草』の誤りによるものとも考えられる。『大和本草』は松蘿をサルヲガセとしているのだが、そこに描かれた図解は明らかにヒカゲであり、蔓草類に分類されている。

ところが、橘守部の『万葉集檜婦手』になると「こゝはたゞ常の苔なるを通はして書けるにも有るべし」とし、鹿持雅澄の『万葉集古義』も、『代匠記』と同じ苔の歌を引用して、「老木の枝には、苔のむすものなれば、年久しきにたとへたるなり」というふう^ニに説明している。ヒカゲともサルヲガセとも付け加えないのは『和名抄』が「松蘿」を苔類に置いて萬豆乃古介としていることに起因しているのだからコケという以上には関心を示さない。さらに昭和以降の注釈書では、山田孝雄『万葉集講義』が『和名抄』を引用して、

…今も「さるをがせ」又「さがりごけ」といひて深山の松杉などの樹皮にかかりて長く垂れてあり。ここにては、松に対していへるなれば、「生」は「ムセル」とよむべし。本卷下「二二八」に「子松之末爾蘿生萬代爾」とあるその例なり。

とする。したがって、山田『講義』は題詞の表記が「松蘿」ではなく、「蘿生松」であることは意識しているが、あくまでもこれをサルヲガセと捉える。さらに、澤瀉久孝『万葉集注釋』は、『本草和名』と『和名抄』とを引用して、

「ひかげ」は別で、ここに蘿とあるは右の両書に松蘿とありマツノコケとあるもので、一云佐流乎加世とあるやう、今もさるをがせと呼び、深山の松の古木に附着して絲屑のやうな形で垂れ下がつてゐるもの。

と説明している。伊藤博『万葉集釋注』は沢瀉と同じく「古木に糸屑状に垂れさがるさるおがせ」としている。

『万葉集』には「松」と「蘿」の組み合わせがあつても、「松蘿」の語は何処にも見出すことができない。それにもかかわらず『和名抄』の「松蘿マツノカサ」に拠つて解釈しているのである。額田王のC歌題詞は「松蘿」とはしておらず「蘿生松」である。

四、万葉歌に詠まれる「蘿生」

ここまでは、額田王C歌題詞について述べてきたが、『万葉集』中に「蘿生」の表記は八首中に歌語として用いられており、これをどのように訓むか（解釈するか）は当該題詞だけの問題ではないのである。

当該題詞も含めた九例の「蘿生」の他に、「蘿」字を用いているのが、卷七の分類項目「詠蘿」とそこに配された歌の「蘿ひびし席」である。なお、筆者はこのほかに卷五の梅花宴の序文中の「松掛蘿而傾蓋」（松は蘿を掛けて蓋を傾く）も加える。その理由は、「蘿」と「羅」は誤写や通用が多いこと、また、この部分は松のこんもりと茂つたさまを「蓋（きぬがさ）」に見立てる常套表現であるため「羅（うすぎぬ）」では意味が重複してしまうからである。詩経以来、漢文学において松を表現する際の常套手段ともいえる蘿を、〈蓋から下げる紐飾り〉に見立てたものと考えべきだからである。これについては後で述べる。

あわせて十二例の蘿は次に掲げるとおりであるが、歌の九首の用例のうち八首までが額田王のC歌題詞と同じ「蘿生」であることは注意しておきたい。そしてこれらは全て「こけむす」と訓まれてきたのである。

しかし、「小松が末に蘿生ひびしまでに」、「真木の葉も…蘿生ひびしにけり」のような針葉樹の葉や梢に付くものまで苔類と解し

てよいのか、いま一度考え直す必要があるだろう。なお、万葉集中に「こけ」を音仮名で表記した例は見られない。

- ① 從吉野折取蘿生松柯遣時、(卷二当該歌の題詞)
- ② 妹が名は千代に流れむ姫島の小松が末に蘿生までに(卷二・二二八)
- ③ 松掛羅而傾蓋(卷五・梅花三十二首并序)
- ④ 奥山の岩に蘿生畏くも問ひたまふかも思ひあへなくに(卷六・九六二)
- ⑤ 詠羅(卷七の雑歌の分類項目)
- ⑥ み吉野の青根が嶺の蘿蓆誰か織りけむ経緯なしに(卷七・一一二〇)
- ⑦ 足代へ行く小為手の山の真木の葉も久しく見ねば蘿生にたり(卷七・一一二四)
- ⑧ 奥山の岩に蘿生畏みと思ふ心をいかにかもせむ(卷七・一三三四)
- ⑨ 結へる紐解かむ日遠みしきたへの我が木枕は蘿生にけり(卷十一・二六三〇)
- ⑩ 我妹子に逢はず久しもうましもの阿倍橘の蘿生までに(卷十一・二七五〇)
- ⑪ ……飛鳥の川の水脈を早み生しため難き石枕蘿生までに(卷十三・三二二七)
- ⑫ 神奈備の三諸の山に斎ふ杉思ひ過ぎめや蘿生までに(卷十三・三二二八)

右のうち、三例(①③⑤)は漢文体表記の題詞と序文および分類項目語であり、それ以外の九例が歌の表現である。⑤の分類項目「詠蘿」の下に収められるのは⑥の一一二〇番歌一首のみなので、この歌をどのように解釈するかは重要であろう。

前掲歌のうち、②「小松が末」、⑦「真木の葉」、⑫「斎ふ杉」の三首が「蘿」と常緑の針葉樹が一緒に詠まれている点において、C歌題詞の「蘿生松柯」にイメージが近いように見受けられる。しかし、②は挽歌で、その題詞に「和銅四年歲次辛亥河辺宮人姫島松原見孃子屍悲嘆作歌二首」とあるうちの一首目であり、二首目に「沈みにし妹が姿を見まく苦しも」とある鎮魂の歌である。

さらに、⑨⑩は疎遠になった男女の歌で、逢わなくなつてから月日が経過してしまつたことを表現しており、二人の關係が過去のものとなりつつある証として提示されるのが「蘿生」なのである。我々はつい、国歌「君が代」の歌詞によつて、〈苔むす〉ことに永遠性・質美や寿歌的な要素を連想してしまいがちであるが、前掲九首の内容を詳細に確認してみると、確かに時の経過を示すものはあるが、これらの「蘿」のイメージは必ずしも額田王のC歌の「はしきかも」に結び付けられるものではないのである。

まず、⑥の蘿を詠ずる歌を見てみよう。

み吉野の青根が嶺の蘿らう誰か織りけむ経緯なしに（卷七・一一二〇）

この表現も石上にびっしりと生えた苔を想像してしまいがちだが、これを記紀の岩屋戸神話に見える「蘿」（かげ）と解し、「かげむしろ」と訓むことは可能だろう。かげ、つまり〈ひかげかづら〉は地面上を這う植物であり、岩の間に生えたものが、平らな岩の上を這つて分枝して繁茂するのを見かけることもある。遠くから見ると絨緞のように見える。蘿を〈蓆し編んだ敷物〉に見立てているのであるから、〈編む〉ことをイメージさせる蔓状の植物が密生していると解した方が適切であろう。このように考えてみると、次の④と⑧も蘿らうと解することが可能である。

奥山の岩に蘿らう生な畏おそくも問とひたまふかも思おもひあへなくに（卷六・九六二）

奥山の岩に蘿らう生な畏おそみと思おもふ心をいかにかもせむ（卷七・一三三四）

二首は「畏おそみ」「畏おそくも」をみちびく序詞として「奥山の岩の蘿」を使っている。畏むべき対象は歌を贈る相手である。「奥山の岩」は「蘿」の生えた場所を示しているに過ぎず（むろん、生えた場所も重要ではあるが）、序詞の中で畏怖に直接結びつく要素は「蘿」そのものである。岩に神が宿るといふような神聖な場所でない限り、岩にコケがはえること自体は畏怖すべきことではない。しかし、二首とも特別な岩とはしておらず、ただ〈奥山の岩〉と表現をしているにすぎない。歌の主旨は、相手に対して〈畏敬の念を以て接する〉ことであるから、ここに詠まれる

「蘿」がコケではなく、神事に使う（ひかげかづら）と考えた方が「畏み」をみちびくことに違和感はないだろう。次に掲げる歌は、「かげ」を得難く特別なものとして詠んでおり、④⑧に近い。

あしひきの山かづらかげましばにも得難きかげを置きや枯らさむ（巻十四・三五七三）

したがって、④⑧の「蘿生」は「かげおひ」とよむべきだと考える。但し、ひかげかづらは地上を這う植物で松には付かないので、②⑦⑫のように枝や梢につくことをうたったものに当て嵌めるのは適切ではない。これらは、樹木に絡むツタやカヅラの類とみるべきであって、これも「こけむす」とよむべきではない。また、漢字表記は異なるのだが、次の歌も従来「こけむす」と訓まれてきた語をもつ。

いつの間も神さびけるか香具山の梓杉が末に薜生までに（巻三・二五九）

この「薜生」は前掲の②⑦⑫の「蘿生」と同様であろう。「薜」も蔓性植物をさす漢字である。「香具山」とするの
も何やら岩屋戸神話の「蘿」を彷彿させる。これらは「かづらおふ」または「かづらなす」とよむべきであろう。

みてきたところによって、「蘿生」は、時の経過を表現するものがある一方で、別のことを意味すると考えざるを得ないものもあることが確認できた。C歌題詞の場合、時の経過だけでは、〈松の枝〉の送り主が額田王に何を伝え
たかったのか解らなくなってしまう。「年寄ってしまいましたね」でもなからう。時間の経過を言うのであれば、相
手の「長寿」を祝うものでなければ礼を失することになる。少なくとも、前掲の歌を従来のように「こけむす」と
よむ限り、そこから額田王を「はしきかも」と喜ばせるような要素を読み取るには無理がある。

以上、「蘿」にかかわる歌を概観してみたが、従来のように全ての用例を「こけむす」と解釈するには問題がある
ことははっきりしたであろう。少なくとも、①②③⑦⑫のように針葉樹と共に詠まれる「蘿」は、そこに絡む植物
であることはわかった。なお、漢文学では、「蘿」は『唐韻』が説明するように「女蘿」と表現されることが多い。

四、漢文学の「女蘿」と『懷風藻』の「蘿」

「蘿」を「女蘿」として、これを蔓性植物と解釈するとき、最初に触れておかなければならないのは、『詩経』小雅の甫田之什「頍弁」である。「頍弁」は三つの章から成るが、その第一章と第二章には〈松に絡む女蘿〉が「葛輿女蘿、施于松柏」「葛輿女蘿、施於松上」と歌われる。「頍弁」は小雅に収められることから諸侯が賓客をもてなす際のうたであり、「兄弟親戚の如き親しい人々を燕(宴)する」と解釈できるのであるが、前後に配列される詩と同様に、古くから幽王を風刺するものとされてきた。

諸侯刺幽王也。暴戾無親、不能宴樂同姓、親睦九族、孤危將亡、故作是詩也。

幽王は暴戾無親で、同姓・九族（累代の親族姻族）が集い睦み合う宴樂を催すことができず孤立して、安定的国家經營を為しえなかつた。この亡国の王を諷刺するために、敢えて、同姓九族が宴樂親睦して喜び合うさまをうたつたという解釈であるが、そこに表現されているのは、同胞が顔を合わせて宴を催す喜びである。

有頍者弁、実維伊何、爾酒既旨、爾殽既嘉、

豈伊異人、兄弟匪他、葛輿女蘿、施于松柏、

未見君子、憂心奕奕、既見君子、庶幾說懌。

有頍者弁、実維何期、爾酒既旨、爾殽既時、

豈伊異人、兄弟具來、葛輿女蘿、施於松上、

未見君子、憂心怲怲、既見君子、庶幾有臧。

右の傍線の箇所で、蔓状の植物〈葛〉と〈女蘿〉が松柏の上に這うさまをいう。「施」は延びる意である。この句の

注には「女蘿菟絲松蘿也」とある。女蘿が施^ほびることをうたう句の説明「松の蘿」が後に誤って女蘿の別名とされたりしい。先に『和名抄』を引用して蘿^ら||松蘿||女蘿であることを述べたが、ここにあげる〈松上の女蘿〉と一番歌の題詞〈蘿生松〉とが同じものであると考えることは可能であろう。

『詩経』「頰弁」詩の場合は、蘿が松上に延びるさまは親族が密接に絡み頼り支え合うことの比喩として提示されているのである。弓削皇子が吉野から〈松の枝〉を送った理由が「頰弁」の蘿と松を下敷きにしたのであれば、そこに込められたのは「葛輿女蘿、施于松柏」に続く句「未見君子、憂心奕奕、既見君子、庶幾說懌」（会わないと心配で落ち着かないが、既に会えば喜びでいっぱいだ）であろう。第二章でもこれが繰り返されて「葛輿女蘿、施於松上」に「未見君子、憂心怏怏、既見君子、庶幾有臧」が置かれる。少し語句を変化させてはいるものの意味は殆ど同じである。〈松の枝〉に額田王を氣遣うようなメッセージが込められていなければ、受け取った額田王が「愛^はしきかも」と嘆ずることはない。前稿でも述べたが、〈蘿の絡んだ松〉を詠む詩をもう一つあげておきたい。女性の恋心をうたう「華山畿」のなかの一首である。

松上蘿 願君如行雲 時時見經過

これも「頰弁」に近い意味で、絡み合った蘿と松によって親密な間柄を示し、このあとに自分の思い「時時見經過」（行く雲のごとくいつも姿を見せて通り過ぎよ）を述べる。詩経の「頰弁」であっても、華山畿であっても、「顔を見たい」がその主旨なのである。これを額田王のC歌の題詞に当て嵌めて考えるならば、弓削皇子からのメッセージは「お気持ちはこちら（松上蘿）でしょう。わかっていますよ」ということになろう。それ故、額田王はB歌の「吾が思へるごとく」を理解してくれたことを示す「蘿生松」を「はしきかも」と詠んだのである。

ところで、同時代の『懷風藻』詩には詠作の場（環境）を象徴的に表現するための小道具として「蘿」を詠んだものが見られる。次に作品の該当部分のみを挙げる。

イ 飛文山水地 命爵薜蘿中(三一)「遊吉野」藤原不比等)

ロ 石壁蘿衣猶自短 山扉松蓋埋然長 已得攀龍鳳、大隱何用覓仙場(九〇)「左僕射長王宅宴」藤原宇合)
ハ 結蘿為垂幕 枕石臥巖中(一〇四)「初春在竹溪山寺於長王宅宴追致辭」釈道慈)

など、明らかに蔓性の植物として表現されている。藤原不比等の詩は、吉野を「山水の地」「薜蘿中」として、神仙の地として描く。「薜」も「蘿」も蔓性植物をさす文字であり、これを組み合わせた熟語であるので、葛の類であることは明らかだが、特定の植物を指している訳ではない。藤原宇合の詩も不比等と同様で、作詩の場である長屋王邸が隠者の住まい風に設えられていることを描くのに「石壁蘿衣」、「山扉松蓋」をいうのである。蘿衣は「短」とするのであるから、岩石に這い伝わる葛のごとき蔓性の植物である。これを「短」とするのは結句「已得攀龍鳳、大隱何用覓仙場」を導く伏線とするためである。本来、俗世と隔たった仙場(神仙の住居)に近づくには、険しい岩壁に垂れ下がる蘿葛を攀じて行かねばならないのである。しかし、その蘿はまだ短くて役に立たないが、敢えて蘿葛を攀じずとも、既にその気分を味わっており、また、龍鳳のような長屋王に攀じて(親しんで)いるのだから、今さら仙境を探し求める必要は無い。我々は大隱なのだから。宇合は、蘿と松を組み合わせることで表現することが定番だということを理解していたのである。釋道慈は自分が修行する山中の寺における生活を、「結蘿為垂幕 枕石臥巖中」とする。この岩場と蘿葛の組み合わせも中国六朝時代以来の遊仙文学の風景描写のなかで発達したものである。かづらで編んだとばりは薜帷なども表現される。『懷風藻』にも「蘿」をコケの意味で使用したと確認できるものは無く、「蘿」「薜」「葛」などの蔓植物は、山中の隠者や神仙の生活する場所の特別な雰囲気醸し出すための小道具として描かれる。

先にも触れたが、『芸文類聚』草部には「蘿」ではなく、「女蘿」が項目として立てられている。「女蘿」が詩経の「頍弁」に詠まれていることから、蔓性の植物という言葉として定着しており使用頻度が高かったためと推測される。そこには、基礎的文献としての『広雅』^(注)と『毛詩』(詩経)の引用があり、その後詩二首のみを載せる。

広雅曰、女蘿、松蘿也。莧絲也。毛詩曰、葛与女蘿、施于松上。

「詠女蘿」詩 王融（齊）

羃歷女蘿草、蔓衍旁松枝、含烟黄且緑、因風卷復垂。

「賦松上輕蘿」詩 劉刪（陳）

葉繞千年蓋、條依百尺枝、属与松風動、時将薜影垂、
学帯非難結、為衣或易披、山河若近遠、独自楚人知。

右の二首からも漢文学の世界の「蘿」は、蔓植物を指しており、松樹と結びつくものとわかる。また、『芸文類聚』が草部の他の項目においては『本草経』を冒頭に引用して、さらに複数の基礎的文獻を引いて説明をするのに対して、女蘿の項では「広雅」と毛詩の句のみである。つまり、「女蘿」の項目は必要だが、とくに詳しい説明を要しない語句だとわかる。王融の「詠女蘿」は「羃歷」として（草などが覆い被さるさま）女蘿の蔓は枝に依って延び広がることをうたう。陳の劉刪の「賦松上輕蘿」の詩題には「輕蘿」とあるが、これは風に吹かれて軽やかなさまをいう語であつて、植物名ではない。この詩で植物をさす語は「蘿」と「松」のみであり、繞、條、薜、垂、帯などの語が「蘿」の形状をよく表している。『詩経』の小雅「頍弁」をはじめとして、「松に蘿」の組み合わせは定型化していたものようである。万葉の時代には自明のこととして理解されていた事柄が、『和名抄』の「萬豆乃古介一云佐流乎加世」の記述によって、解釈が変わってしまったともいえるだろう。「蘿生松柯」における我が国の上代人の理解も『毛詩』の注「延展蔓生於松柏、有相附之理也、兄弟亦然」に近いものであつたはずである。謂うまでもなく、『詩経』は当時の知識階級には基本書籍である。なお、先にも示した『万葉集』巻五の同伴旅人の「梅花宴の序」文中に見える風景描写「松掛蘿而傾蓋」も同様の象徴的意味を持つのだろう。

五、結び

筆者は額田王と弓削皇子の当該歌を〈恋歌〉としてではなく、本来の相聞〈親しい者が互いに近況を尋ねたり報告したりする意〉として捉えている。相聞の「聞」は新聞の聞と同じでニュースの意である。同じ巻二でいえば、九一と九二、一〇一と一〇二、一〇三と一〇四などがそれにあたる。

歌の応酬が繰り返される場合、最初のテーマを全く変えずに、歌を返すことは考えられない。最初の受け答えの表現を意識しつつもテーマを転換させて別の方向へもっていくのが普通だろう。筆者はかつて、弓削皇子と額田王の贈答について、「いにしへに恋ふる鳥」として懐旧を題材にしているが、懐旧そのものが主題なのではなく、ほととぎすの言葉遊びをたのしんだやり取りであることと結論づけたのであるが、その考えは今も変わらない。弓削皇子が投げかけた「鳴きながらそちらへ飛んで行つたいにしへに恋ふる鳥」の謎掛けの歌に対して、額田王が出した答え「ほととぎす」に「けだしや鳴きし吾が思へること」がプラスされた。こんどは額田王が「吾が思へること」によって、〈都に残っている私の気持はどんなでしょう〉と謎をかけたのである。（ほととぎすは〈程時過ぎにけり〉もしくは〈かく恋ふ〉どちらと思うか）と。弓削皇子が出した答えは「歌」ではなく吉野の「蘿生松柯」で示されたのである。親族・姻族が集う饗宴の喜びと逢えない間の心情をうたう「頬弁」を想起させる蘿の絡んだ松である。ここに込められたメッセージ「あなたのお気持ちは、逢えないと残念ということでしょう。それはこちらも同じですよ」を読み解いて満足した額田王はC歌に「愛しきかも」と詠んだのである。

「蘿生松柯」の解釈が「サルヲガセ」へと傾いた理由は、江戸期に度々刊行された『和名抄』が準拠とされていたことに因るのだが、その記述もまた、本草学の書物の影響を受けて混乱があったと推測される。『毛詩』に端を発する〈松と蘿〉の文学表現は形状による比喩や象徴性が重要なのであるが、本草学は葉として用いることが目的で植物を厳密に特定する必要がある。その本草学がいう「松蘿」は、〈蘿の生じた松〉ではない。

【注】

(注1) 別の機会のものとみる説もある。ただし、根拠があるわけではなく、三首が同一機会のものであることが明確でないため、断定をさけている。もし、三首が一連のものであれば、C歌題詞の冒頭に「更」「又」などの文字があつてしかるべきであるが、それが無いため、別の吉野行幸時の歌と解釈する余地が残されるのである。なお、諸注釈を確認してみると、三首を一連のものとして挙げており、C歌の題詞にある「従吉野折取蘿生松柯遣」という行為は弓削皇子によるもので、額田王のC歌は弓削皇子に向けられたものであると推測するのが大方の見解である。

(注2) 拙稿「額田王の一三番歌と華山畿の「松上蘿」——題詞の「蘿生松柯」が意味するもの——」(『文芸と思想』八〇号 二〇一六年二月)

(注3) 『倭名類聚抄』は伝本によつて表記が異なり、(和名抄・倭名抄・倭名抄類聚鈔など)一定しない。また、内題と外題が異なるものもあるため、本稿では『和名抄』で統一する。なお、刊本については、宮澤俊雅の「倭名類聚抄の板本について」(北大文学部紀要四六一二)が参考になる。

(注4) 『日本紀私記』は奈良時代から平安前期にかけて宮中で行われた日本紀講筈の訓読の記録。

(注5) 『切韻』は周祖謨編『唐五代韻書集存』に、『広韻』は周祖謨の『広韻校本』に依った。

(注6) 『本草和名』醍醐天皇の侍医深根輔仁の撰。延喜年間(九〇一—九二二)に成る。

(注7) サルマガセ(猿麻伽)は蔓状の植物ではない。本州では霧が多く発生する亜高山帯(もしくは緯度の高い地域)の樹木(コマツガ、シラビソなど)に附着することが多い。霧中の水分と光合成だけで成長するため、一部が枯死して陽当たりのよい樹木や枝を水平に伸ばすカラマツなどに付いて垂れ下がる。

(注8) 菟絲「ねなしかずら。山野に自生するヒルガオ科の蔓性の一年生寄生植物。灌木や草木の上に蔓を伸ばして寄生するもので、松の樹上のような高い所に付くことはない。

(注9) 『爾雅註疏紀聞』幕府の医官(本草学者)の小野蘭山の著。寛政年間に成る。

(注10) 契沖の『代匠記』精撰本の完成は元禄三年(一六九〇)。真淵『万葉考』は明和五年(一七六八)刊。千蔭『略解』は文化九年(一八一二)刊。

(注11) 貝原益軒『大和本草』は本草学の対象となるものを分類解説。正徳五年(一七一五)刊行。

(注12) 『広雅』十卷は魏の張揖の撰。注箋等諸説を採って『爾雅』を増大させたもの。

(注13) 拙稿「弓削皇子と額田王の贈答歌——どのように懐旧を読み取るか——」(『香椎潟』四七号 二〇〇二年十二月)